

高機能広汎性発達障害児・者への支援の取り組み (2)

－「エブリの会」, 1998年から2010年までの経緯－

佐々木 全* 加藤 義男**

(2011年3月4日受理)

Zen SASAKI Yoshio KATO

On the Support for Children and Adults with High Functioning Pervasive Developmental Disorders (2)

－ About the activity of "Ebri Group" from 1998 to 2010－

I 問題

L D, A D H D, 高機能広汎性発達障害等の、いわゆる発達障害児・者に対する理解と支援が広がり深まりつつある。このような状況の一翼を担っているのが、インフォーマルな支援グループ(以下、支援団体と称す)であろう。これは、親の会や有志の研究会、N P O等の総称であり、関係者による関係者のための支援団体である。これらは、公的な支援が行き届かない「狭間」の存在であった発達障害児・者やその家族的な機能を果たしたり、その必要性を社会に啓発したりしている。

このような支援団体が精力的に展開される中で、二つの観点からの検討課題が見出された。一つ目は、実践論的課題というべき具体的な実践内容への着目であり、多種多様な実戦報告がなされている(例えば、芦澤、宇根本, 2002¹⁾; 末永、蔦森、吉成、堀越他, 2003²⁾; 佐々木、加藤, 2003³⁾)

二つ目は、運営論的課題というべきものであり、支援グループやその活動に関する運営それ自体への着目である。これは、市民活動の継続の中でその運営(目的や方針、活動内容や方法、組織の維持など)における悩みが顕在化し、「立ち上げ当

初の、我武者羅で熱意溢れる時期は過ぎ、活動の継続という緻密で実際的な作業の連続が求められる時期となった」との指摘に表れている(森野、吉田、新堀、栗野, 2004⁴⁾; 佐々木2008⁵⁾)。

さて、筆者らが1998年以来取り組んでいる「エブリの会」は広汎性発達障害のある児者を対象とした市民活動の一つと言える。また、エブリの会の名称は、「高機能広汎性発達障害のある人を支援する会」の愛称であり、かつ、2010年度現在の活動内容である「エブリ教室」、「エブリクラブ」、「エブリ広場」の総称として便宜上用いている団体名である。

エブリの会について、筆者らは具体的な実践内容に着目した実践論的見地からの報告(例えば、佐々木, 2005⁶⁾; 佐々木、加藤, 2004⁷⁾; 佐々木、加藤2008⁸⁾)や、運営論的見地からの報告に含まれるであろう活動方針の検討に関する報告をしている(佐々木、田代、加藤, 2004⁹⁾)。

近年、筆者らは、エブリの会の運営の内容や方法において大きな変化を経験している。このような状況にあって、本稿ではエブリの会における経緯を整理し、後に続く運営論的検討の資料とした。

* 岩手県立盛岡みたけ支援学校, 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究協力者

** 岩手大学教育学部

Ⅱ 目的と方法

本稿の目的は、エブリの会の経緯と現状をまとめ、その運営に関する検討の視点を提起することである。

そのための方法として、エブリの会に関する運営資料、公開されている実践報告、岩手県内のほかのグループによる実践報告などの関連資料の収集と整理、分析を行う

Ⅲ 結果

1 エブリの会の事業内容に関する経緯と現状

2010年度現在の、エブリの会における事業内容は以下(1)～(3)である。また、現在の事業内容にはないが、過去に取り組まれたものは以下(4)、(5)がある。

(1) エブリ教室

エブリ教室は、高機能広汎性発達障害のある小学生に対し、休日活動を提供することを目的とするグループである。1998年立ち上げ、2000年の休止期間を経て、2001年から現在まで継続している。活動中は、ボランティアスタッフが活動の従事し、保護者は別室にて待機(保護者同士の談話)する。参加児は盛岡市内およびその近隣地域在住であり、高機能広汎性発達障害(あるいは高機能自閉症、アスペルガー障害)の診断があるか、その疑いがあるとされる。また、彼らはほとんどが、第二筆者が相談対応した児であった。近年では、他の相談機関からの紹介をうけ、第一筆者が相談対応した児もいる。2010年度現在、11名の参加があり、7名が対象児(男女比=4:3)である。また、4名がきょうだい(未就学児)である。

(2) エブリクラブ

エブリクラブは、高機能広汎性発達障害のある者(中学生以上の年代)に対し、休日活動を提供することを目的とするグループである。2000年～2001年に開催された「エブリ同窓会」を前身として、2002年からエブリクラブと改称し、現在まで継続している。年4回、土曜日の午前中の開催で

ある。参加者は、エブリ教室の「卒業生」と、それ以外の希望者である。後者は、岩手県各地から集っており、筆者らが相談対応し随時参加を勧めた。2010年度現在、22名の参加者があり、16名が対象者(男女比=15:1)である。また、6名がきょうだい(小学生)である。

(3) エブリ広場

「エブリ広場」は、年度途中にエブリ教室への参加を希望した児や未就学児を対象とし、エブリ教室への参加を待機しつつ、年に3回程度活動をする暫定的なグループである。エブリ教室への新規参加については年度途中では行わないことにしている。そこで2010年度から、エブリ広場を経て翌年度始、または就学年度にエブリ教室に移行するという手続きをとることにした。本稿を執筆している現在は、参加希望を待っている状況であり、未実施である。

(4) エブリ学習会

エブリ学習会は、保護者やスタッフを対象として、年1回実施した。2002年～2004年の間に合計3回開催した。その内容は、専門家や保護者による講演であった。

(5) エブリ談話室、エブリ保護者の集い

エブリ談話室と、エブリ保護者の集いは、いずれも保護者を対象とした会合であり、保護者同士が集い近況や悩みなどを話し合った。当初、2000年当初は「談話室エブリ」と称していたが、2003年以降には、中学生以上の保護者を対象としたエブリ談話室、就学前及び小学生の保護者を対象としたエブリ保護者の集いとして分化した。2000年～2008年の間に月一回程度、平日の午前中に開催した(加藤, 2008¹⁰⁾。

2 エブリの会の運営組織に関する経緯と現状

エブリの会の発端は、エブリ教室の開催であった。これは、1998年に加藤義男研究室の臨床活動として2年間の試行的な実践として立ち上げられた。この運営組織として、第二筆者を代表とし、第一筆者を含む当時の大学院生数名がスタッフとして参加し、運営の実務にあたった。

2001年～2009年の間、エブリ教室が教育実践総合センターの事業として再開され、第二筆者を代表とし、第一筆者が運営の実務にあたった。また、スタッフとして、第一筆者を含む現職教員等と、大学院生、大学生が参加した。なお、談話室エブリ、エブリ保護者の集いについては、第二筆者が運営の実務にあたった。

1998年～2009年においては、岩手大学の教育学部を運営上の後ろ楯としてきた。しかし、2010年からは、運営組織として、第一筆者が代表と運営実務にあたることとし、運営組織を実質的に独自、独立運営とした。

3 エブリ教室とエブリクラブの実践内容に関する経緯と現状

（1）活動の方針

1998年のエブリ教室の立ち上げ当初、活動の目的は、参加児に対する支援内容や支援方法を検討し、そのあり方を提起することであった。この取り組みによって、支援内容としてはソーシャルスキル、支援方法としては、小グループによる遊びの形態をとったトレーニングを志向した（佐々木、加藤、佐々木、2001a¹¹）。

エブリ教室が、高機能広汎性発達障害のある児を対象としたのは、筆者らにとって次のような経緯に基づく必然だった。すなわち、1990年代の「いわゆるLD」（佐々木、2000¹²）として、現在でいうところの発達障害概念が注目され始めたわけだが、2000年代前後になると、「いわゆるLD」という広範で多種多様な状態像を含んだ概念が、徐々に分析的に明確化され始め、「いわゆるLD」が、認知特性のアンバランスさゆえの学習上の困難を主訴とする、狭義のLD、ADHD、高機能広汎性発達障害等の概念が周知され始めた。そのような状況にあって、筆者らは、臨床的に最も適応状況が思わしくないという印象が強かった高機能広汎性発達障害のある児に対する支援の検討の必要性を感じた。期せずして筆者らの当時抱いた「臨床的に最も適応状況が思わしくないという印象」が今日、様々な観点から裏付けられ

ようとしている（三浦、小川、佐藤、2009¹³；田中、2010¹⁴）。その支援の検討においては、高機能広汎性発達障害の中核的な症状としての社会性の障害へのアプローチが考えられ、ソーシャルスキル・トレーニングと結び付けられたわけである。さて、エブリ教室が再開した2001年～2006年までは、1998年～1999年の実践による志向を踏襲し、一層の追及を試みた。支援方法の検討においては、ソーシャルスキル・トレーニングと構成的グループエンカウンター統合的な方法論、TEACCHプログラムや応用行動分析などのアイディアに共通するような方法論を開発、蓄積するに至った（例えば、佐々木、加藤、佐々木2001b¹⁵；佐々木、加藤、伊藤、熊谷2006¹⁶）。

しかし、2006年度には、それまでの訓練志向から、参加児者にとっての休日活動の充実をねがい、自立的な活動の実現を志向するようになった。このことは、今日的な自立観に即して、方針を検討したことによる。ここでいう「自立」とは、その意思的側面である「主体性」に基づく活動への参加であり、その参加においては参加の児者一人一人が適切な支援条件下で、自分の力や個性を最大限に発揮してなされる取り組み（名古屋、2002¹⁷；名古屋2006¹⁸）の実現を意味する。すなわち、エブリ教室の活動が、参加の児者にとっての充実した休日活動として位置づけられることには他ならない。

このようなエブリ教室における活動の方針は、当然のことながら、エブリクラブにも反映された（佐々木、加藤2005¹⁹；佐々木、加藤、2009²⁰）。

（2）活動の内容

上記した活動の方針は、活動の内容としても反映された。年間活動計画について、2001年度、2007年度のを表1と表2に一覧した。

これによると、前者、訓練志向の時期では、活動内容が上半期では単発的に設定されている。また、下半期では劇活動をメインにしているが、並行して単発的なゲームが抱き合わせになっている回がある。これに対して、後者、自立志向の時期

	日 程	活 動 内 容	
1	6月3日	自己紹介	「自己紹介カード」を作成し、その発表を行った。
2	6月23日	ボーリング	ペットボトルとゴムボールを用いたボーリング、スコアラーやピンをならべる等の係活動を通り入れた。
3	8月25日	鬼遊び	独自のルールと専用のコート上での「線鬼」を行った。
4	9月22日	選択活動	ボーリング、独自のルールによる「だるまさんが転んだ」、風船を使用した感覚おもちゃ作りを個々の児童の選択により行った。
5	10月27日	買い物、ホットケーキ作り	材料を買い、調理を行った。
6	11月24日	劇活動①	劇の鑑賞により、役割や話の筋道を理解し、個々の児童が独自の「絵台本」を作成した。なお、劇活動は演技を通してのソーシャルスキルトレーニングを兼ねている。
7	12月22日	劇活動②、イス取ゲーム	劇による表現を行った。また、クリスマスの行事としてゲームに取り組んだ。
8	1月26日	劇活動③、カルタ取りゲーム	劇では表現にアレンジを加えた。また、正月の行事として、独自のルールによる「カルタ」に取り組んだ。
9	2月23日	劇活動④	「劇の発表会」と称して、劇の発表と鑑賞を行った。

表1 2001年度の年間活動計画

	日 程	活 動 内 容		
		単元名	活動名	活動の概略
1	4月28日	タグラグビー	じゃんけん陣取り	チーム対抗で、ラグビーボールをバトン代わりに抱えて、相手陣地に踏み込む(トライ)ことをめざし競い合った。
2	6月9日		鬼遊びからタグラグビーへ	体育館にて、鬼役の腰につけたタグを獲る「タグとり鬼」に取り組んだ。その後、攻守2チームに分かれて、攻撃チームは、ボールを相手陣地に運ぶ(トライ)ことを目指し、守備チームは相手のタグを獲ってその進行を阻むことを目指し対戦した。
2	7月28日		タグラグビーリーグ戦	体育館にて、4チーム総当たり戦で、タグラグビー(簡易のルール)で行った。
3	8月25日	エブリ遠足	ものづくり	木材(端材)と100円ショップの製品を組み合わせでの製作活動。木製の車と風の2テーマから選択し、デザイン、設計、材料の調達、製作を行った。
4	9月22日		遠足	野外施設にて、調理活動を行った。中学生グループ、エブリクラブとの合同行事とした(木製の車や風を持参した)。
5	10月27日	劇活動	ミッションラリー	携帯電話で与えられるヒントをもとにして、大学構内及び近隣の地点を巡った。その後、それぞれの地点にあったヒントを総合し、「謎解き」と称して劇活動の内容を予想し話し合った。
6	11月23日		劇をしよう①	2つのチームごとに、劇の役割や話の筋道を児童一人一人が独自の「絵台本」にて表現した。また、劇の発表会をめざして演技の練習や打ち合わせを行った。小道具作りや、発表会の演目表示作りなども行った。劇の発表会では、チーム相互の劇を觀賞しあった。
7	12月22日		劇をしよう②	
8	1月26日		劇をしよう③	
9	2月16日		劇をしよう④	
		発表会		

表2 2007年度の年間活動計画

では、「単元」と称して年間の活動が大きくまとめられています。上半期はタグラグビー。間にものづくりや遠足のようなイベントをはさみ、下半期には劇活動に取り組んでいる。単元というのは、教育現場の用語で、教育内容の一まとまりを意味する。すなわち、一定期間を一定の内容を設定して取り組むということである。活動を單元化することで、次のようなメリットがある。すなわち、①一定期間同内容の活動に取り組むことになれば、参加児はその活動に期待や見通しを持ちやすくなること、②繰り返しの活動によって、参加児は自分なりに活動の目当てを持ち、その達成度を自分なりに振り返りやすくなること、③繰り返しと発展的な活動が展開されれば、スタッフにとっては参加児の様子が把握しやすく、自身の動きや判断が精練されやすいこと、である。

活動に見通しがもてたり、目標がもてたりすることで参加児は存分に力を発揮しやすくなり、活動を楽しみに思えやすいと。すなわち、これは参加の児者の主体的な活動を促しやすい支援方法の一つであると考えられる。（佐々木、2009²¹⁾;佐々木、加藤、2008²²⁾;佐々木、加藤、2010a²³⁾;佐々木、加藤、2010b²⁴⁾）。

4 他の関連団体とのかかわりに関する経緯と現状

エブリの会と他の関連団体とのかかわりには、活動内容の参照、分担、参加児者やスタッフの紹介などがあった。

(1) 活動内容の参照

活動内容の参照として、エブリ教室は、発達障害児の小グループ活動としての先行事例であった「なずな教室」を参照して活動の形態や内容を企画した経緯があった。同様に、エブリ教室は、その後岩手県内各地で立ち上げられた、発達障害児者に対する支援活動のモデルとなった。例えば、2002年に奥州市水沢区（当時の水沢市）で立ち上げられた「わくわく教室」、2004年、北上市を拠点地域として立ち上げられた「S S T教室あじっこ」、花巻市を拠点地域として立ち上げられた「S

S T教室花童風童」において参照された。これは第一筆者がそれらの立ち上げに関わり、自己模倣的な要因もあった（佐々木、三田、関口、山下、宮澤、安部、2009²⁵⁾;佐々木、佐々木、安部、三田、2009²⁶⁾;高橋、及川、朽木、師田、三田、佐々木、2010²⁷⁾）。

また、「エブリ談話室」、「エブリ保護者の集い」は、先行事例としての保護者グループであった「なずな談話室」を参照した。また、第一筆者はこれらを参照し、「S S T教室あじっこ」や「S S T教室花童風童」との姉妹活動として「談話室あじわい」、「保護者談話室」を立ち上げた（岩手県立花巻養護学校^{注)}、2005²⁸⁾;2006²⁹⁾;2007³⁰⁾;佐々木、三田、関口、山下、宮澤、安部、2009³¹⁾）。さらに、これらは、2008年、2009年に現在の筆者の所属である特別支援学校におけるセンター的機能の一貫としての保護者支援事業としても参照されている。

(2) 活動の分担

エブリの会の活動において、保護者支援を意図したエブリ談話室とエブリ保護者の集い、そして、関係者に対する支援を意図したエブリ学習会は現在開催されていない。大局眼的な表現をすれば、これらの活動内容は、関連団体とのかかわりの中で、発展的に解消したといえる。例えば、保護者支援のための活動は、エブリの会の保護者が中心となって2007年に立ち上げた、「岩手発達障がい親の会・くぶくぶ」における機能として、保護者支援活動が展開されていることによる。

また、エブリ学習会のような関係者に対する支援についても、J D D ネットいわてなど他の関連団体主催による企画によって多くの機会が提供されている。

(3) 参加児者やスタッフの紹介

参加児者の紹介は、エブリの会への紹介がある場合とエブリの会から紹介をする場合の双方向がある。例えば、ある地域に在住の中学生が、当地での支援団体の対象年齢が合わなかったために、中学生以上の年代を対象とするエブリクラブへ紹介された。また、別のある地域に在住の児とその

保護者が、ある相談機関からエブリ教室の情報を得て、参加を希望した。その地域を拠点としている支援団体があつたが、保護者はその存在を知らなかったので、第一筆者から情報提供し、その支援団体へ紹介をした。

なお、盛岡近隣に在住でも、他の発達障害があるが、高機能広汎性発達障害がない児者の場合、発達障害のある児者を対象としている、なずなの会（加藤，1993³²⁾；佐々木，2002³³⁾）などの他の支援団体を紹介している。

同様にスタッフの紹介もある。例えば、エブリの会のスタッフで職場の移動があつた際に、移動先の地域を拠点としている支援団体の活動を紹介し参加を勧めるということである。

Ⅳ 考 察

結果に基づき、ここではエブリの会の運営に関する検討の視点を考察し提起する。

1 エブリの会の独自性からの視点

エブリの会の運営について、今後検討の視点を明らかにするために、その独自性への着目が必要であろう。それがエブリの会の目的や方針を規定する大きな要素となるからである。

エブリの会の独自性として、次の2点が挙げられた。すなわち、①支援対象の特化である。これには二つの内容があり、一つは、立ち上げ当初から、高機能広汎性発達障害に特化してきたことである。もう一つは、高機能広汎性発達障害のある児者本人に特化するようになったことである。②支援内容としての、本人の休日活動提供に特化するようになったことである。これらは、経緯からすれば、一定の必然性をもって追及されたものであつたが、今後のエブリの会の取り組みの中でその意義と成果が説明されることが望ましい。

なお、高機能広汎性発達障害に特化してきたことについて、補足する。発達障害の概念は、包括的な「いわゆるLD」からLD、ADHD、高機能広汎性発達障害へと一端は分化したものの、軽度発達障害、あるいは発達障害として収束され、

現場に根付こうとしている。県内のほとんどの支援団体においても、支援の対象は発達障害である。このような状況にあつて、エブリの会が対象を高機能広汎性発達障害に特化していることの意義は何か。一つに、高機能広汎性発達障害のある児者に固有の適応上の課題があるという主張がそれに当たるかもしれない。このような主張が確かな根拠を持ちえるのか、あるいは、根拠を持ちえたときに、エブリの会が応えるべき支援内容は何か、今後、エブリの会の実践内容の成果からもこのことの意義が検討される必要があるだろう。

2 エブリの会と他の支援団体とのかかわりからの視点

1998年以来のエブリの会の取り組みは、実践モデルとして岩手県内の他の支援団体において参考にされた。そのために、現在もなお、相互交渉による機能の分担それらとのかかわりがあり、その中でエブリの会における役割の分担や事業内容の特化が実現されている。例えば、保護者支援を目的とした事業は、他の支援団体に任せ、エブリの会は本人支援に特化しているのだが、これは支援団体が複数ある盛岡近隣地域だからこそ出来る分担である。他の地域のように支援団体が一つであるならば、本人支援と保護者支援をそれぞれ目的とした複数の事業を計画する必要性が生じる。

このような分担状況は期せずして至つた結果であるが、この妥当性や成果が取り組みに基づく俯瞰的な視点から検討される必要があるだろう。

3 エブリの会の運営実態からの視点

エブリの会の取り組みの継続発展に際しては、その運営実態への着目によって、最適化された運営内容、方法が志向される必要がある。このことに関して、運営組織とその機能に関する詳述とその分析、評価、改善策の検討をめざし、運営課題に関する把握の観点から提案されている。すなわち、①「人的課題」、②「経営的課題」、③「実動的課題（ハード面；施設設備状況、ソフト面；活動内容のレパートリー）」（佐々木，三田，2009³⁴⁾）で

ある。これらに即しての運営実態の明確化され、検討される必要があるだろう。

注釈

注) 現在の、岩手県立清風支援学校。

謝辞

これまでエブリの会で出会い、かかわってくださいました皆様に感謝申し上げます。

文献

- 1) 芦澤清音, 宇根本聡 (2002): 思春期を迎えたLD児及びその周辺児の居場所作り・仲間作りの取組み, LD研究, 11, 1, 49-58.
- 2) 末永カツ子, 蔦森武夫, 吉成静枝, 掘越秀範, 高橋桃代 (2003): 高機能自閉症への小集団支援の試み, 日本特殊教育学会第41回大会発表論文集, 426.
- 3) 佐々木全, 加藤義男 (2003): 「エブリ教室」における実践報告－高機能広汎性発達障害児に対する, 劇活動によるソーシャルスキル指導の試み－, LD研究, 12, 1, 15-23.
- 4) 森野勝代, 吉田美恵, 新堀紘太郎, 栗野健一 (2004): LD親の会に集まる人々とは～関東ブロック専門委員会による親の会自己分析の試み1～, LD研究, 13, 1, 33-41.
- 5) 佐々木全 (2009): 岩手県における, “通所支援教室”の今後の展望～立ち上げから継続へ, シフトチェンジの中で見えてきたもの, はなまき軽度発達障害児の教育と生活を支援する会, 年報花童・風童, 5, 18-21.
- 6) 佐々木全 (2005): 高機能広汎性発達障害児に対する「エブリ教室」におけるソーシャルスキルトレーニングの一例, 第6回自閉症支援実践賞入賞論文集, 社団法人日本自閉症協会, 5-17.
- 7) 佐々木全, 加藤義男 (2004): 高機能広汎性発達障害児に対する「エブリ教室」の教育実践に関する報告 (第三報)－「鬼遊び」を題材とした多目的アプローチの検討－岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要, 3, 119-129.
- 8) 佐々木全, 加藤義男 (2008): 高機能広汎性発達障害児に対する「エブリ教室」の教育実践に関する報告 (第九報)－「单元化」した活動の意義やあり方の検討－岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要, 7, 217-230.
- 9) 佐々木全, 加藤義男, 田代美幸 (2004): 高機能広汎性発達障害児・者への支援の取り組み－「いわて高機能広汎性発達障害児・者を考える会」の模索・草創－, 岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要, 3, 131-141.
- 10) 加藤義男 (2008): 教育臨床・特別支援教育プロジェクト報告－心理・教育臨床活動のまとめ (平成19年2月～平成20年1月)－, 岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要, 7, 233-235.
- 11) 佐々木京子, 加藤義男, 佐々木全 (2002a): 高機能広汎性発達障害児の指導に関する実践的研究－認知特性に注目して－, 岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要, 1, 205-218.
- 12) 佐々木全 (2000): “いわゆるLD”児の教育支援に関する一研究, 岩手大学大学院教育学研究科修士論文 (未刊行).
- 13) 三浦光子, 小川香織, 佐藤正恵 (2009): 若者就労支援の場に見る就労困難な若者の特徴－ウェクスラー式成人用知能検査 (WAIS) の分析－, 日本発達障害学会第44回研究大会発表論文集, 112-113.
- 14) 田中弘美 (2010): 青年期を迎えた軽度発達障害者の現状と課題－岩手における相談・支援活動を通して－, 発達障害研究32(1), 42-51.
- 15) 佐々木全, 加藤義男, 佐々木京子 (2002b): 高機能広汎性発達障害児への指導に関する実践的研究 (2)－「エブリ教室」の教育実践に関する報告 (第一報)－岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要, 1, 219-231.

- 16) 佐々木全, 加藤義男, 伊藤雅枝, 熊谷謙三 (2006): 高機能広汎性発達障害児に対する「エブリ教室」における教育実践に関する報告(第六報) - 劇活動によるソーシャルスキル・トレーニングの試み - 岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要, 5, 201-215.
- 17) 名古屋恒彦(2002): 生活中心教育入門, 大揚社, 31.
- 18) 名古屋恒彦 (2006): 子ども主体の本物の生活を, 生活中心教育研究, 7, 1.
- 19) 佐々木全, 加藤義男 (2005): 高機能広汎性発達障害児の指導に関する実践的研究(3) - 「エブリクラブ」の教育実践に関する報告 - (第一報) - 岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要, 4, 129-146.
- 20) 佐々木全, 加藤義男 (2009): 中学生以上の, 高機能広汎性発達障害児に対する「エブリクラブ」の教育実践に関する報告 - (第二報) - 岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要, 8, 263-274.
- 21) 佐々木全 (2009): エブリ教室における年間計画, はなまき軽度発達障害児の教育と生活を支援する会, 年報花童・風童, 5, 23-25.
- 22) 前掲論文 8)
- 23) 佐々木全, 加藤義男 (2010a) 高機能広汎性発達障害児に対する「エブリ教室」の教育実践に関する報告(第11報) - 単元「タグラグビー」における実践的検討 -, 岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要, 9, 175-190.
- 24) 佐々木全, 加藤義男 (2010b): 高機能広汎性発達障害児に対する「エブリ教室」の教育実践に関する報告(第12報) - 単元「劇活動」における実践的検討 -, 岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要, 9, 191-206.
- 25) 佐々木全, 三田敏明, 関口栄子, 山下仁志, 宮澤寛行, 安部千恵子 (2009): 地域の市民活動による, 軽度発達障害のある児(者)に対する支援の現状 - はなまき軽度発達障害児の教育と生活を支援する会(花童・風童)の実践 -, 日本発達障害学会第44回大会発表論文集, 52-53.
- 26) 佐々木全, 佐々木章, 安部千恵子, 三田敏明 (2009): 軽度発達障害児に対する「S S T教室あじっこ」の実践報告, LD研究, 18, 2, 147-154.
- 27) 高橋祥子, 及川高生, 朽木静, 師田めぐみ, 三田敏明, 佐々木全 (2010): わくわく教室 - 等身大, サポーターたちの思い, はなまき軽度発達障害児の教育と生活を支援する会, 年報 6, 23-32.
- 28) 岩手県立花巻養護学校 (2005): 知的障害養護学校の特別支援教育センターにおける, 軽度発達障害児支援のあり方に関する一研究(1) - あじさい特別支援センターにおける実践的検討 -, <http://www2.iwate-ed.jp/hki-y>. (Retrieved 2007. 9. 19)
- 29) 岩手県立花巻養護学校 (2006): 知的障害養護学校の特別支援教育センターにおける, 軽度発達障害児支援のあり方に関する一研究(2), <http://www2.iwate-ed.jp/hki-y>. (Retrieved 2007. 9. 19)
- 30) 岩手県立花巻養護学校 (2007): 知的障害養護学校の特別支援教育センターにおける, 軽度発達障害児支援のあり方に関する一研究(3), <http://www2.iwate-ed.jp/hki-y>. (Retrieved 2007. 9. 19)
- 31) 前掲論文 2 3)
- 32) 加藤義男 (1993): 学習障害(LD)児の現状と課題に関する一考察, 岩手大学教育学部研究年報, 53, 1, 123-135.
- 33) 佐々木全 (2002): なずな教室における実践報告 - 言語の遅れを伴うADHD児の特性に応じた指導 -, LD研究, 11, 1, 32-40.
- 34) 佐々木全, 三田敏明 (2009): 地域の市民活動による, 軽度発達障害のある児に対する休日活動提供の現状 - 岩手県内3つのグループによる「通称支援教室」の運営上の課題, 日本発達障害学会第44回大会発表論文集, 180-181.